

キウイフルーツ新規かいよう病(Psa5 系統)の発生活消長とその対策					
〔要約〕黄色系品種において、キウイかいよう病 Psa5 系統の葉での病徴は 4 月下旬頃から認められ、5 月から 6 月にかけて増加する傾向にある。					
果樹試験場・病害虫研究担当				連絡先	0952-73-2275 kajushiken@pref.saga.lg.jp
部会名	果 樹	専 門	果樹病害虫	対象	キウイフルーツ

〔背景・ねらい〕

2010 年以降佐賀県北部のキウイフルーツで結果母枝の枯れ込みや新梢の枯死等が認められ、問題となっている。原因菌は *Pseudomonas syringae* pv. *actinidiae* と同定され、「キウイフルーツかいよう病」と診断されたが、新規の「Psa5 系統」とされた(澤田ら、2014)。

キウイかいよう病(Psa5 系統)の発生活消長を明らかにし、防除適期を把握すると共に、生育期防除の有効性を明らかにする。

〔成果の内容〕

1. 黄色系品種において、キウイフルーツかいよう病(Psa5 系統)の葉での病徴は、4 月下旬頃から認められた(図 1)。
2. 黄色系品種において、キウイフルーツかいよう病(Psa5 系統)の発病葉率は、5 月～6 月にかけて高まり、7 月以降は低下した(図 1)。
3. 黄色系品種において、新梢伸長 10 cm 程度までの慣行防除に加え、4 月にも追加して防除を行うことで、キウイフルーツかいよう病(Psa5 系統)の発病は抑制される(表 1)。

〔成果の活用面・留意点〕

1. 発病葉率の経時的推移(図 1)は、6 圃場(黄色系品種)でランダムに 600 葉/圃場を調査した結果である。
2. 防除試験(表 1)は、2 圃場(黄色系品種)で行い、A 圃場では 200 葉/区×3 反復、B 圃場では 100 葉/区×3 反復調査した。
3. 農薬について、一部指導方針が異なる品種があるので使用にあたっては関係機関に確認する。

[具体的なデータ]

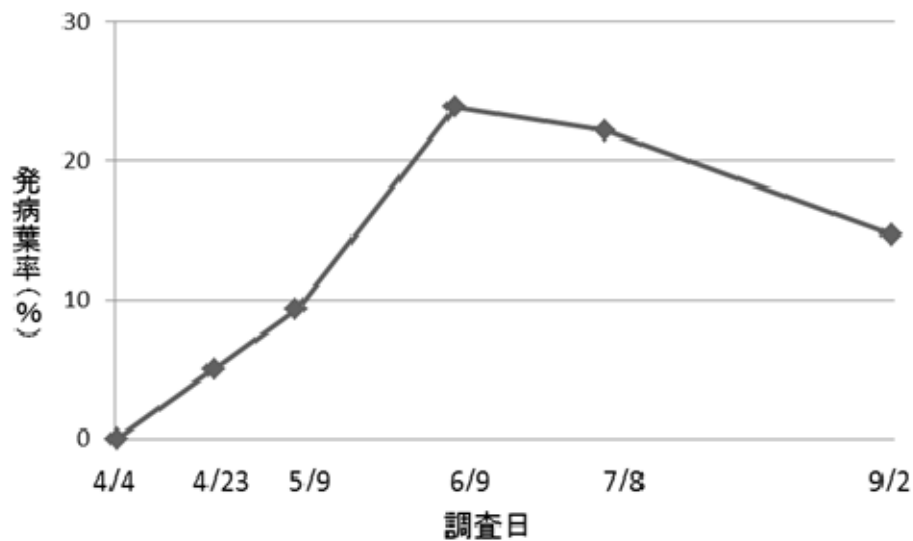


図1 キウイフルーツかいよう病 (Psa5 系統) の発病葉率の経時的推移 (2014 年)

表1 防除法の違いによるキウイフルーツかいよう病 (Psa5 系統) の発病抑制効果

(2014 年)

区	薬剤散布時期と散布薬剤				発病葉率 (%)					
	発芽前	3月24日	4月4日	4月16日	A圃場			B圃場		
					4/23	5/9	6/9	4/23	5/9	6/9
1	ICボルドー66D (50倍)	カスミンボルドー (1,000倍) (クレフノン200倍加用)	コサイド3000 (2,000倍)	アグリマイシン100 (1,000倍)	0.5	0.3	2.5	3.7	3.3	7.0
—				0.3	1.3	10.0	1.0	4.7	7.7	
—				0.8	3.0	13.3	3.0	7.7	15.7	
3 (現行)										

[その他]

研究課題名: キウイフルーツの新系統かいよう病に対応した診断技術、対処方法の開発、
果樹における難防除および新奇病虫害の迅速な防除技術の確立

予算区分: 農食事業、県単

研究期間: 2014年、2013年～2015年

研究担当者: 野口真弓、白石祥子、口木文孝

発表論文等: 平成26年度 佐賀県果樹試験場業務年報